

源氏物語の指導研究

——言葉により内容に迫る指導——

山田 丈美

一、研究主題について

橋本治氏は、現代の日本人について、次のようなことを言っている。

「今の人たちはあまり本を読まない」ということがあります。本を読まないからといって、そういう人たちが言葉を失ってしまっているということはありません。しゃべりまくるテレビの影響もあって、本を読まない人たちは、逆におしゃべりになります。おしゃべりを当たり前にするようになってしまった人たちにとって、本に書いてある文章を読むというのは、かなりまだるっこしい行為なのです。

(橋本治『ハシモト式古典入門』ごま書房 一九九七年)

日進月歩する映像文化に比べ、文章表現のスタイルは変化しにくい。現代の、特に若い世代の人にとって、古典を読むということは、

橋本氏の言葉を借りれば、「まだるっこしい行為」の最たるものとしてとらえられているのではなからうか。しかし、そのまだるっこさの中に、現代の私達が忘れかけていた、もっと質実な生き方や考え方を呈示してくれる材料がある。古語の内包する意味世界と、それを支えていた当時の人々のもの見方・考え方について、現代語とも見比べつつ、迫ってみたい。本稿では、高校生を対象に実施した古語に対する意識調査の結果も踏まえ、言葉により内容に迫る古典指導の方法について考える。

二、高等学校古典教育における内容重視への方向

近年、何とか生徒達の古典への興味を喚起させたいという現場の先生方の実践が報告されてきている。その根底には、次のような思いがある。

十年一日の如く、古文は教師が音読し、教師自身が現代語訳を試みるか、生徒の幾人かに指名して解釈させるかして、後は文法的説明で終わり、といった具合で果たして次代を担う青年に古典の楽しさを伝えることができるのだろうか。

(菊地國雄「古典教材の効果的指導法の探求 実践報告」)

『日本私学教育研究所紀要第24号(2) 教科篇』一九八九年)

現代語訳と文法的処理という従来からの古典の授業パターンは反省に立ち、菊地氏は、音読の重視や板書の見直し、関連書物の回覧アンケートの実施、「擬古文によるパロディ」創作などの実践を報告されている。教師主導の授業から、何とかして生徒主体の学習へと転換させたいという思いによる様々な試みである。アンケートでは、普通科高校三年生を対象に、「好きな古典作品」「原文または訳本でも全部読んでみたい古典作品」を調査されている。その第一位はどちらも「源氏物語」であった。「源氏物語」が、生徒達にそれほど意欲を起こさせる存在であるならば、古典教育におけるその位置と役割は大きい。

「源氏物語」について、近年におけるこの他の実践(注1)を見ていると、内容の上で、できるだけ一つの流れを持って読み進められるように教材を自主編成したり、学習する側の足場として、テーマや中心人物を設定したりする実践がある。また、内容に踏み込む

補助的材料として、現代語訳やマンガを使用したり、文法を読解や鑑賞に役立つものとしてとらえ直そうという実践もある。グループ学習により生徒達の主体的な学習活動を促そうという試みもある。授業を現代語訳や文法的処理を行うことに終始させず、古典の面白さを内容の面で生徒達に伝えようというこれらの試みは、古典教育における大きな変化であり、成果でもある。

三、古典学習における「言葉の学習」

古典学習における内容重視の方向は、大きな進歩である。ここからさらに充実を図るために課題となるのは、内容に裏打ちされた言葉の学習ではないだろうか。現代語訳だけを頼りに「ものの見方・感じ方・考え方」を議論したとしても、それらを表現するために古人が託した言葉を素通りしたことになる、古典の学習として十分とは言えない。現行の学習指導要領の「古典I」の「内容ア」の事項では、次のように書かれている。

ア 古文や漢文に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

この事項について、『高等学校学習指導要領解説 国語編』(文部

省（平成元年）では、次のような解説がなされている。

語句の意味や用法を正確に理解することは、読解、鑑賞の出発点であるとともに、国語についての認識を高め、言語感覚を

養う基本でもある。（前掲書 一〇三ページ）

また、学習指導要領の「古典講読」の「内容イ」での取り上げ方は、次のようである。

イ 古文や漢文に用いられている語句の意味、用法を理解し、その特有の表現を味わうこと。

この項目について、前掲の『指導要領解説』では、以下のよう

に解説されている。古語や漢字の意味、用法を理解する際には、辞書や文法書、参考資料などの利用に慣れさせ、指導の効果を高めるようにすることが必要である。また、古典の文章を読解し鑑賞する際には最初から辞書を用いるのではなく、前後の文脈や現代語からの連想などによって、文中の古語や漢語の意味を推測するというような指導も考えられる。そうした学習を繰り返すことによつて、生徒は次第に語句の意味、用法を理解し、読むことの楽しさを自覚することができるようになる。

（前掲書 一二〇ページ）

ここに書かれている「古語の意味、用法を学習する際」の方法を整理すると、次のようにまとめられる。

- ① 辞書や文法書、参考資料などの利用
- ② 前後の文脈からの連想
- ③ 現代語からの連想

実際には、この三種類を織り混ぜながら古語の学習を進めることになると思うが、③についてはあまり意識して行われていないのではなからうか。外国語を学ぶ時と同様に、ともすれば、古典も現代の日本語とは全く別の言語体系にとらえ、すべてを現代語に訳さなければならぬと考えがちである。それが、長い間、文法的処理と現代語訳という授業パターンを作ってきた一因でもあった。しかし、『指導要領解説』にもあるように、古語にも現代語からの推測が及ぶ範囲があるはずである。そこで、現在の高校生に対して、現代語と古語との両方を視野に入れた言語意識調査を実施したいと考えた。

四、アンケート調査の方法

調査は、平成九年十月に、岐阜県内のある県立全日制普通高校で実施させてもらった。進学者が多い高校である。対象は三年生とし、文科系五クラスで、次のようなアンケート調査を行った。

古語に用いるアンケート

年 組 男・女

I. 下の文章は、「源氏物語」の車争いの場面の抜粋です。光源氏の恋人の六条御息所が光源氏の行列を見ようと車を出掛けますが、後からやってきた正妻の養の上の車に押しのけられる形となります。
これを読み、下の問いに答えてください。

- ① 斎宮の御母御息所、もの思し乱るる勢にもやと、忍びて出でたまへるなりけり。
- ② (養の上方の) 御車の輿に押しやられてものも見えず。
- ③ いみじうわたしこと限りなし。
- ④ またなう人あわろく、悔しう、何に来つらむと思ふにかひなし。
- ⑤ ものも見て帰らむとしたまへど、(略) さすがにつらき人の御前渡りの侍たるも心弱しや。
- ⑥ (源氏が) つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。
- ⑦ (御息所自身) おし消たれたるありさま、こよなう思さる。
- ⑧ 御息所 影をのみみ たらし川のつれなきに 身のうきほどぞ いとど知らるる (歌)
- ⑨ 涙のこぼるるを、人の見るもはしたなけれど
- ⑩ (源氏の) 目もあやなる御さま尊敬のいとしう出でばえを、見ざらましかばと思さる。
- ⑪ かかる御もの思ひの乱れに御心地なほ例ならずのみ思さるれば...

(問い)

左の文章中のア～サの言葉の意味を、どの程度予測できますか。予測できると思う程度を、次の1～3の番号から選び、その番号を○で囲んでください。

1. ほび予測できる 2. いくらか予測できる 3. 全く予測できない

I・IIの項目は、「源氏物語」の葵の巻の車争いの場面と賢木の巻の野宮での別れの場面の抜粋で、記号のつけられた語句の意味がどの程度予測できるかを回答するものである。IIIの項目は、記号のつけられたア～トの語句のうち、「a、現代語の意味との違いを感じる語」と「b、現代語の意味とほぼ同じと感ずる語」を挙げるものである。ア～トの二十の語句は、基本語彙とした。それに関しては、大野晋氏の『文法と語彙』(岩波書店 一九八七年)の「奈良・平安時代和文脈系文学の基本語彙」を参考にした。

ア、思し乱る	1	2	3
イ、勢め	1	2	3
ウ、わたし(話し)	1	2	3
エ、悔し	1	2	3
オ、つらし	1	2	3
カ、つれなし	1	2	3
キ、心づくし	1	2	3
ク、こよなし	1	2	3
ケ、うし(憂し)	1	2	3
コ、はしたなし	1	2	3
サ、いとし	1	2	3
シ、もの思ひ	1	2	3
ス、心地	1	2	3

セ、はるけし	1	2	3
ソ、あはれなり	1	2	3
タ、艶なり	1	2	3
チ、はかなし	1	2	3
ツ、かりそめなり	1	2	3
テ、にほひ	1	2	3
ト、めでたし	1	2	3

II. 下の文章は、野宮での、光源氏と六条御息所の別れの場面の情景です。これを読み、1と同様に、セ～トの言葉の意味の予測できる程度を答えてください。

a. 現代語の意味との違いを感じる語

b. 現代語の意味とほぼ同じと感ずる語

- ① はるけき野辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。
- ② 物の言ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。
- ③ ものはかなげなる小娘を大垣にて、寂願どもあたりあたりいとかりそめなり。
- ④ はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひたまへるさま、にほひ、似るものなくめでたし。

御協力どうもありがとうございました。

調査にあたっては、「あまり考え込まず素直な感覚で、十分程度で回答してほしい」とお願いした。なお、ここで引用した「源氏物語」の部分については、この高校の使用教科書には掲載されておらず、授業では学習しない。

五、アンケート調査結果

アンケートの調査結果は、表1・グラフ1・グラフ2・グラフ3の通りである。

(1) I・IIの設問についての調査結果

I・IIの設問は、「1、ほぼ予測できる」「2、いづらか予測できる」「3、全く予測できない」のいずれかをチェックするものである。そのチェックされた全員の度数を合計して総人数(一八七人)で割ったものを平均値とする。これが1に近ければ、予測できる程度が高いということになり、反対に3に近ければ予測できない程度が高いということになる。

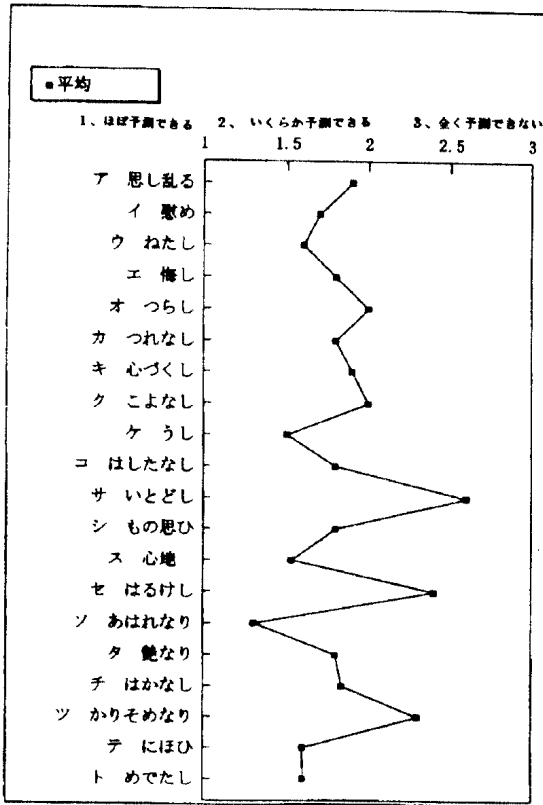
i、予測しやすい語句

この平均値から見ると、1に近い、すなわち予測できるとする度合いが高い語句は、「あはれなり」「うし(憂し)」「心地」「ねたし(妬し)」「にほひ」「めでたし」である。これらは、古語の中でも基本中の基本の語である。古典の学習で見慣れた馴染みのある

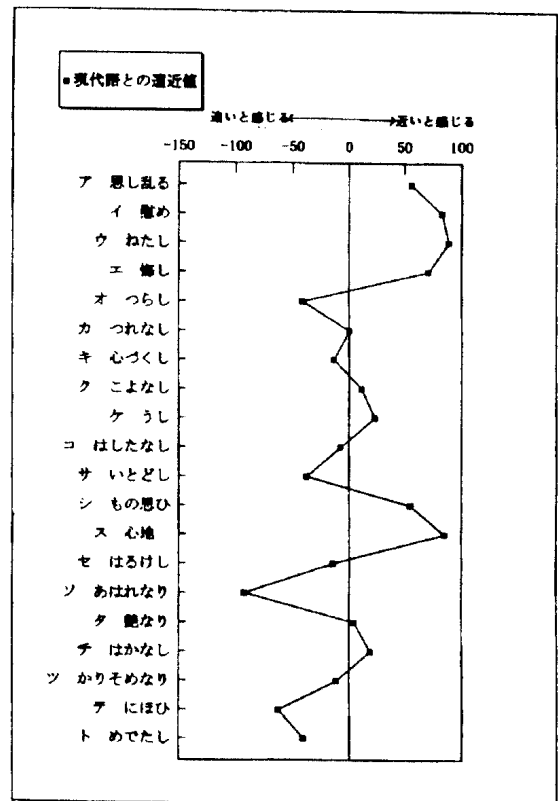
〈表1〉 I～IIIの調査結果

語句	設問 I・II				設問 III		
	1 ほぼ予測できる	2 幾らか予測できる	3 全く予測できない	予測程度の平均値	a 現代語と同じ	b 現代語と違う	現代語との遠近値
ア 思し乱る	44人	112人	31人	1.9	18人	74人	56
イ 慰め	74	90	22	1.7	18	101	83
ウ ねたし	95	68	23	1.6	14	103	89
エ 悔し	70	87	30	1.8	14	85	71
オ つらし	45	96	46	2	82	40	-42
カ つれなし	62	97	28	1.8	40	40	0
キ 心づくし	61	84	42	1.9	38	24	-14
ク こよなし	63	67	56	2	30	41	11
ケ うし	111	55	21	1.5	35	58	23
コ はしたなし	59	98	30	1.8	59	51	-8
サ いとどし	9	58	120	2.6	45	7	-38
シ もの思ひ	66	94	27	1.8	13	68	55
ス 心地	106	62	19	1.5	10	95	85
セ はるげし	19	73	93	2.4	32	17	-15
ソ あはれなり	138	37	12	1.3	105	12	-93
タ 艶なり	72	85	30	1.8	32	36	4
チ はかなし	59	99	29	1.8	29	48	19
ツ かりそめなり	29	68	90	2.3	33	21	-12
テ にほひ	95	75	17	1.6	90	27	-63
ト めでたし	97	73	17	1.6	74	33	-41

〈グラフ1〉意味を予測できる程度



〈グラフ2〉現代語との遠近値



語句が、まず意味を予測しやすいという結果となった。

ii、予測しにくい語句

一方、平均値が3に近い、予測ができにくかった語句は、「いとどし」「はるけし」「かりそめなり」の順である。実数で見ると、「こよなし」も、「全く予測できない」と回答した者が五十六人と多い。先程のiでの予測できる程度の高かった語句が、人の心情や様子についての語句が多かったのに対して、こちらは物事の程度を表したり、人間以外の事物の様子についての語句が多い。特に「いとどし」のように、次に続く言葉と連動しながら程度が一段とまっさつていることを表す場合や、「こよなし」のように、他のものとの程度の違いが優劣いずれにも用いられる場合は、意味の取り方が難しい。また、「こよなし」は、本文中でのように連用形の「こよなく・こよなう」の形で用いられることが多いが、これを終止形にして抜き出して予測程度を質問したために、文中との印象が異なったとも考えられる。

iii、中間的語句

iに続いて予測程度の高い語句は、「慰め」「悔し」「つれなし」「はしたなし」「もの思ひ」「艶なり」「はかなし」「思し乱る」「心づくし」「つらし」である。平均値で言えば一・七二にあてはまり、「ほぼ予測できる」の側に傾いている。これらは、現代でも使われ

たり、類似した語句が現代語辞典にも載っていたりする。

そのため、現在、生徒達自身が持っている現代語の感覚をもとに予測したのではないかと考えられる。前述の『指導要領解説』で整理した「古語の意味、用法を学習する際の方法」で言えば、③にあたる。生徒達が自分の持っている言語能力で古語の意味を予測し、古文の内容に踏み込んでいくというのは、重要な学習要素である。そのことで、開きがちである古典との距離はぐっと縮まる。

しかし、現代語と古語とで意味のズレがある場合には、注意を払わなければならない。これを踏まえ、次の(2)では、I・IIの設問での予測できる程度の結果と、IIIの設問での現代語の意味との共通性や差異についての結果を関連付けて見てみたい。

(2) IIIの設問についての調査結果とI・IIの結果との関連

「a、現代語の意味との違いを感じる語」と、「b、現代語の意味とほぼ同じと感ずる語」として挙げられた語の総数(のべ)は、八一一对九八一であった。bに挙げられた語の種類や回数多さは予想外であった。現代の高校生は、古語に対して、私達が考えるほど遠い存在だとはとらえていないということであろうか。そのような明るい手応えも感じつつ、生徒達が感ずる古語と現代語との意味の遠近について探ってみたいと考えた。

古語と現代語との遠近を表す数字として、遠近値を設定した。III

の質問は記入式であるが、「a、違いを感じる語」を-1、「b、同じと感ずる語」を+1、何も記入されなかった場合は0として得点化し、その得点とそれぞれの人数をかけ合わせて合計したものを遠近値とした。この値は、マイナス方向に数が大きくなるにしたがって現代語からは遠くなり、プラス方向に数が大きくなるにしたがって現代語に近くなる。それを折れ線グラフ化したものがグラフ2(49ページ上段)である。

さらに構造的に考察するために、I・IIの設問での「意味を予測できる程度」の平均値をX軸に、IIIの設問での「現代語の意味からの距離」を表す遠近値をY軸に取り、相関図にしてみた。これがグラフ3である。この相関図より、質問した二十の語句についての生徒達の意識を、次の四グループに分類した。

A、現代語とほぼ同じと予測した語句

ア、思し乱る／イ、慰め／ウ、ねたし／エ、悔し／

ケ、うし／シ、もの思ひ／ス、心地／

B、古語と現代語の中間的位置にある語句

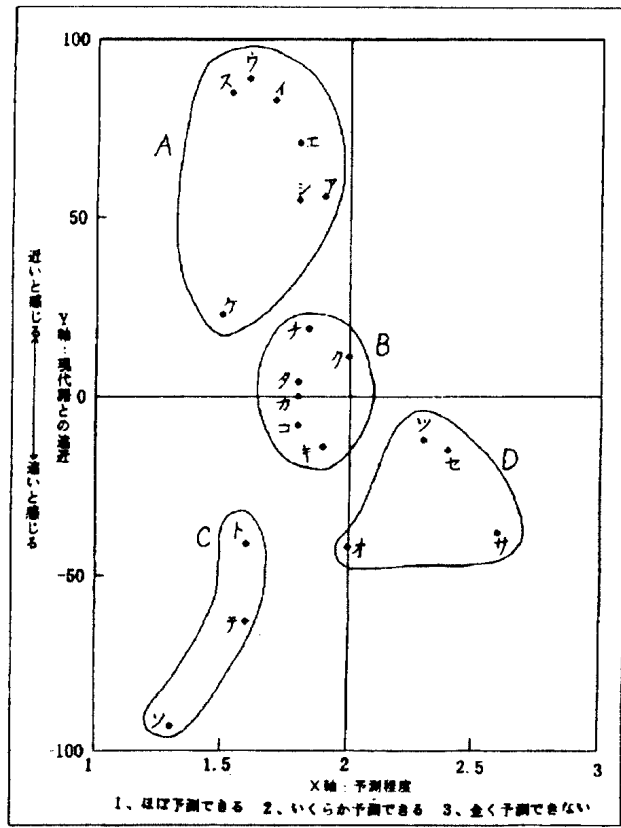
カ、つれなし／キ、心づくし／ク、こよなし／

コ、はしたなし／ク、艶なり／チ、はかなし／

C、現代語と違っていると予測した語句

ソ、あはれなり／テ、にほひ／ト、めでたし／

〈グラフ3〉「予測程度の平均値」と「現代語との遠近値」との相関図



D、予測の程度は低い
が現代語との違いを感じた語句

オ、つらし／サ、いとどし／セ、はるけし／
ツ、かりそめなり／

言葉というのは、使う人や受け留める人の感覚に頼るところが大
きい。言葉そのものの意味や知識もさることながら、それをどうと
らえるか、どう感じるかが鍵になる。特にコミュニケーションにお
いては重要である。現代語との意味の位置関係を予測するこのよう
な試みは、生徒達が言葉をどう感じ、どのような位置付けをするの
かという点を意識することになり、言語感覚を磨くことに一役買っ

てくれるのではなからうか。

さて、先程分類したAとDについて見てみたい。

・Aについて

Aは、現代語とほぼ同じと予測した語句である。このグループに
は、六条御息所の心情を表す言葉が並んだ。「わたし」「うし」は、
古文特有の語句とも考えられるが、「妬し」「憂し」という漢字から
受けた印象や、現代語の「ねたましい(妬ましい)」や「憂き目」
などの使い方などから、距離を感じなかったのではないか。全体と
しては、生徒達が予測したように、ほぼ現代語の意味を適用してよ
いと考える。すなわち、高校生たちが、六条御息所の心情をそのま
まの生の形で理解し得るのが、Aのグループの語句である。生徒達
の感覚を生かす読み取りの上で、大切にしたい。

ただし、ここでの「わたし」は、「かかるやつれをそれと知られ
ぬるが」が主語となることから、他人に対しての「妬ましい、憎ら
しい」という感情よりも、自分自身の中での「いまましい、無念
だ」という感情と受けとった方がよいと感じる。その意味で、現代
語と幾分ニュアンスが違う。この場面での六条御息所の状況や心情
についての想像や総合的な理解が、逆に、個々の語句の理解を助け、
深める。

・Bについて

Bは、古語と現代語の中間的位置にある語句である。これらの語句が、この位置になった理由としては、幾つか要因が考えられる。

「夕、艶なり」は、古語としても現代語としても通用する語ということ、このように中間的に位置づけたのではないかと思われる。

「カ、つれなし」「キ、心づくし」「コ、はしたなし」「チ、はかなし」は、現代語でも使われる語ではあるが、今回のアンケートでは、古文での適当な意味に苦慮した結果の位置付けと考えられる。

例えば、「キ、心づくし」は、現代語では、「心をこめてすること。真心をこめること」という意味である。用例としては、「心づくしのお弁当」「心づくしのおもてなし」などがある。しかし、アンケートにもあるように、古典で、「(源氏が) つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか心づくしなり。」というような場合は、その意味があてはまらない。また、須磨の巻には、「須磨には、いとど心づくしの秋風に、…」のくだりがある。前後の関係から、現代語でのような、他者へのプラス面での働きかけでは使われていないことが予測できる。現代語の感覚で読んだ場合、何かぎくしゃくとした感じを受けることになる。それが、中間的位置になった原因と考えられる。しかし、この言語感覚が、言葉の学習の出発点ともなり得る。このことについては、六の(一)で詳しく述べることにする。

「ク、こよなし」は、(一)でも触れたように、他のものとの程

度の違いが優劣いづれにも用いられ、読み取りにくいことが影響していると思われる。

Bのグループの語句については、辞書を使った学習をして、意味の確認と明確な位置付けをしたい。

・Cについて

Cは、現代語と違うと予測した語句である。Cについては、古語の中でも基本的な語であり、意味の確認が出来ている語句である。この部分に位置付けた生徒達の認識でよいと考える。できるなら、普段から、このグループに属するような、意味の確認ができた古語の数を増やす努力をしておきたい。

・Dについて

Dは、予測の程度は低いが、現代語との違いを感じた語句である。言葉を変えれば、違いを感じつつも、確信がない状態といえる。中でも、「サ、いとどし」「セ、はるけし」「ツ、かりそめなり」は、情景や様子にかかわる語句である。そのイメージが湧いてこないところに、確信のなさがあるのではないか。言葉としてはそれほど難しくなくても、物語の場面構築の役割のある言葉は重要である。イメージを確かなものにするためにも、辞書による基本的な意味の確認のほか、授業での教師の補助説明等も必要である。

六、内容に迫る語句の指導

(一) 言葉の源流を考える

先程のBグループの「心づくし」について、現代語の感覚で読んだ時のぎくしゃくとした感じが言葉の学習の出発点であり、その上で辞書を使った学習をしたいと述べた。

実際に、『角川古語大辞典』(角川書店 一九八四年)を使って調べてみると、次のように説明されている。

こころづくし〔心盡〕①あれこれと思い悩んで心の限りを尽す

こと。また、そのさま。気苦労。心労。

②心を込めてすること。

現代語では、②の意味で使われることが多い。一方、古典では、今回のアンケートでのように、①の用法が多い。

古語を考える場合、現在私たちが使っている言葉ではあるが、古文では意味のズレがあるというBのグループの言葉は、指導の必要性のある言葉である。しかし、一方、古語も現代語も併せた日本語の語彙としてのレベルで、両者をとらえ直す契機ともなり得る。

「心づくし」の意味は、①の説明の言葉にもあるように、「心の限りを尽すこと」である。ただし、心を尽くす方向の違いが、①と②の意味の違いを生むととらえることができる。古文では、自分自身の中で「心が尽き果ててしまうほどの、あるいは尽き果ててしまっ

た状態」を意味し、現代文では相手に「最善のま心を尽くすこと」と考えられる。両者は、「心を尽くす」ということでは共通している。その上で、「心を尽くす」方向や対象の違いを理解することで、単に言葉の意味を暗記するということではない、有意義な学習ができる。

Bに分類した語句のうち、もう一語「コ、はしたなし」について見てみたい。現在でも、「はしたない」の形で、「まあ、そんなことして、はしたない。」というようにたしなめられる時などに使われる。この場合、「見苦しい」「行儀が悪い」という意味である。

しかし、この意味で、本文中の「涙のこぼるるを、人の見るもはしたなけれど…」という六条御息所の心情をとらえようとすると、そぐわない感じになる。もし、この意味で解釈を通そうとすれば、「人(女房)が、六条御息所の涙するのを見るのが行儀が悪い」ということになる。しかし、文末は「…と思さる。」となっており、この文は、六条御息所の心情についての文であるといえる。そのことから、先程の解釈は適当ではない。

『角川古語大辞典』では、「はしたなし」の基本的な意味の説明が、次のようになされている。

「はした」は、数量のあるまとまりからはみ出た部分 また、ひとまわり上のまとまりになるためには不足する部分。「なし」

は形容詞を構成する接尾語。基本的には、人や物事の在り方や為方についての、納りのつきにくい不安定な状態をいい、また、そのような状況を契機とする種々な心情を意味する。

『角川古語大辞典』角川書店 一九八四年)

「はした」については、現在の小学校三年生の算数で、「テープの長さをはかったら、 $1m$ とあと少しはしたがありました。このはしたの長さは、何 m といえいいのでしょうか。」という導入で、分数や少数を学習する。大まかには「はした」||「半端」ととらえられる。この理解が、「はしたなし」の現代語・古語の両方の意味の中核になる。

今回のような古語では、どちらつかずで不安定で納まりのつきにくい状態から引き起こされる、居心地の悪さ・気恥ずかしさ・きまり悪さととらえられる。現代語においては、先程の説明の「あるまとまりからはみ出た部分」「ひとまわり上のまとまりになるためには不足する部分」という両面で、あるべき姿からはずれた、またはそれに達しない、「つつしみが無い、たしなみを欠いた行為や態度」を示すことになったと思われる。

このように、言葉の根幹を知ること、現代語にも古語にも共通する意味を見つけることができる。それは、ともすれば無味乾燥となる膨大な量の古語の意味理解と記憶に、有意義な方法として働く。

小西甚一氏は、基本意味と場面について、次のように述べている。

辞書なんかで①②③…というように分けて説明してあると、いかにも幾とおりかの意味があるようだけれど、同じことばである以上、そんなにかき離れた意味の出でくるはずがない。だから、基本意味さえしっかりつかんでいけば、あとは「場面に応じた言いかえ」として処理できるはずであって、①②③…式の説明に対して「うわあ、めんどろだな」なんて頭をかかえる必要はない。

(小西甚一『フレッシュでわかりよい古文の読解』旺文社 一九六二年 一三五ページ)

ここで言われているように、一つの言葉の持つ①②③…という枝分かれのみを意識するのではなく、言葉が包括するひとまとまりの概念をとらえるという意識をもちたい。小西氏の言うように、その基本意味さえつかんでおけば、場面に応じた意味に対処できると思うことで、生徒達の負担が随分軽くなる。

(2) 車争いの場面での六条御息所の心情

「源氏物語」の車争いの場面では、葵の上と六条御息所が、心にもあらず事件の歯車に巻き込まれていく。葵の上は、「居心地さへなやましなければ思しかげざりけるを」と本文にあるように、自身は行列見物に行こうとは全く思っていなかったのが、「若き人々

(若い女房たち)や「大宮」に急ぎ立てられる形で出掛けることになる。また、六条御息所は、「もの思し乱るる慰めにもやと」忍びで出掛けたのである。酔いも手伝った「若き者ども」の勢いで始まった場所争いは、正妻と愛情が薄れた恋人との座を二分するものとなった。現代の我々でも、その場面の六条御息所の心情は理解できない。

先程の「もの思し乱るる慰めにもやと」は、見物に訪れる前の心情である。「イ、慰め」となることを期待したが、見物で受けたのは「イ、慰め」ではなくて、「ウ、ねたし」「エ、悔し」「オ、つらし」「カ、つれなし」「キ、心づくし」「ケ、うし」「コ、はしたなし」「シ、もの思ひ」などの心情であった。このうちの「オ、つらし」「カ、つれなし」は、光源氏に向けられた言葉であることに注意を払いたい。葵の上と光源氏の両方から自分の劣勢を突きつけられ、「イ、慰め」どころか、逆に「なかなか御心づくしなり。」という結果になってしまった。「キ、心づくし」は、前述したように「心も尽くしてしまっほどのもの思い」という意味になる。

このような行列見物に出掛ける前と、出掛けてからの心情の違いは、事実の展開を叙述の推移にしたがって、いかに臨場感を持って読み取れるかがポイントとなる。東京書籍の『古典講読(古文)』では、狩野山楽筆の「車争い凶屏風」が掲載されており、臨場感を

醸し出している。それと同時に、本文中の「網代」「下簾」「裳」「汗衫」「副車」「楊」「筒」などの言葉について確認しておきたい。意味の確認のみでなく、視覚的な理解も必要である。これらの事物についての理解が、より確かな場面のイメージを作り上げ、この場面における六条御息所の置かれた状況や心情をも鮮明に浮き上がらせる。

今回のアンケートでは、ごく簡単な状況説明のもとで語句の意識調査をしたが、実際の授業ではもう少し事実説明を加えることにより、イメージの膨らみや確かさが増すと期待できる。

七、全体のまとめ

今回実施したアンケート調査項目の「古語の意味を予測できるか」や「現代語の意味とほぼ同じと感じる語」については、その言葉の内包するものを、現代の我々が情動的に共感できるかどうかということでもある。言葉を理解することで、時代を越えた情動的理解が成立し、情動的理解ができることで、逆に言葉の理解も深まる。

高橋いづみ氏は、『ハートで読む古文 誰でも古典が好きになるユニーク読解法』(PHP研究所 一九九五年)の中で、次のようなことを述べている。

私たちは皆、一定の状況が与えられた時に、人間がその状況の

下でどんな心情になるかを推し量る能力を持っている。それをフルに生かしたら古文だって読めるはずだ。

(前掲書 二二二ページ)

千年の時を隔てていても、人間の気持ちは、さほど変わっていないのかもしれない。それは、言葉についても同様である。言葉の根幹を理解することで、現代語と古語の共通項を見いだすことができる。それについては、「心づくし」と「はしたなし」を例に述べた通りである。このような心理面と言語面での共通性は、古文を読む場合の大きな援護となる。

一方、差異という点でも、指導の価値がある。現代語と古語では、「心づくし」を自分の心が尽きるほどととらえるか、相手に対する最善の心の尽くし方とみるかの違いがある。それは、時代的変遷のみばかりでなく、その言葉を支える人々の心情の違いとも考えられる。「心づくしの秋……」というように、秋という季節に自分の心が尽きるほどの感慨を、現代人である私たちは持つであろうか。「心づくし」という言葉から、古人の秋という季節に対する、現代人の持ち得ないような思いの深さを感じる。両者を結びつける語源をpushさせた上で、その言葉に込められた現代にはない意味にも触れ、かえって新鮮さを感じる。このように、できるだけ、言葉とその裏側にある人々の意識や感情を結び付け、内容の読み取りに生かしたい

と考える。

大野晋氏によれば、「源氏物語には形容詞や形容動詞の割合が、ほかの作品に見られないほど高い。」とされる(『文法と語彙』岩波書店 一九八七年)。このことは、「源氏物語」の心情的表現が豊かであることを証明するものである。特に、人物の心情については細やかである。多くの登場人物の中で、六条御息所の心のひだを読み取ることは、「源氏物語」を読む手応えとしては十分である。今回調査させて頂いた高校では、授業では車争いの場面は学習しないが、このアンケート調査で少しでも興味を持ってくれた生徒がいれば有り難い。

最後に、忙しい中、このアンケート調査にご協力頂いた高校に、厚く御礼申し上げます。

〔注〕

1、「源氏物語」の実践記録等

①人物像にせまる指導

・世羅博明「源氏物語」の学習指導(その一)——「明石の上物語」を中心に——

(『源氏物語』学習指導の探求』溪水社 一九八九年)

・梨木昭介「源氏物語作中人物論の追求」(『月刊国語教育』一九

九一年一二月)

②学習テーマを設定した指導

- ・渡辺春美「源氏物語」指導の試み―古典に親しむ態度の育成を目指して―

〔月刊国語教育〕一九八九年四月

③教材の自主編成

- ・川本信朝「生徒を引き込む教材研究―お手盛り源氏物語の勧め」

〔月刊国語教育〕一九九四・九

④グループ学習

- ・横山文一、坂井福作「古文」(源氏物語)の指導―グループ学習による課題学習を中心とした授業」

〔研究報告第一四三号 意欲的・主体的に取り組ませる古典(古文・漢文)の学習指導〕新潟県立教育センター

一九九三年)

- ・渡辺春美「源氏物語」指導の試み―班別学習による「愛と誇り」の学習」

〔月刊国語教育〕一九八九年一〇月

⑤文法を読みとりに生かす指導

- ・松岡武彦「気付きの「けり」を読むために―源氏物語「須磨」の学習」

〔月刊国語教育〕一九九三年八月

- ・高橋ひとみ「源氏物語」の授業―文法を解釈・鑑賞に生かす

授業」

〔たのしくわかる高校国語I・IIの授業〈古典〉〕あゆみ

出版 一九九〇年

⑥マンガを取り入れた指導

- ・南島順子「少しでも楽しく能動的な学習に―『源氏物語』の場合」

〔月刊国語教育〕一九九四年一月

⑦現代語訳を利用した授業

- ・光武一成「高等学校古文授業の一こま」

〔佐賀大國文七〕一九七九年

※特徴別に①～⑦に分類したが、例に挙げたものの中でも、実際には幾つかの要素にわたっている場合がある。

2、参考文献

- ・『高等学校学習指導要領 国語編』文部省 平成元年
- ・高等学校用教科書『古典講読(古文)』東京書籍 平成九年
- ・『新編日本古典文学全集21 源氏物語②』小学館 一九九五年
- ・岩波文庫『源氏物語(一)』岩波書店 一九六五年
- ・橋本治『ハシモト式古典入門』ごま書房 一九九七年
- ・大野晋『文法と語彙』岩波書店 一九八七年
- ・小西甚一『フレッシュでわかりよい古文の読解』旺文社 一九六

二年

・高橋いづみ『ハートで読む古文 誰でも古典が好きになるユニーク読解法』PHP研究所 一九九五年

・小西甚一『学習基本古語辞典』大修館書店 一九八四年

・『新潮現代国語辞典』新潮社 一九八五年

・『マイセレクト 大学入試』でる順『古文単語五五〇』旺文社
一九八〇年

〔付記〕

三年間、聖徳学園岐阜教育大学の科目等履修生として、水曜二限の安田徳子先生の国文学演習（中古・中世）を履修させて頂き、大変勉強になった。

本稿は、第九三回全国大学国語教育学会（平成九年十一月・大阪大会）での口頭発表を骨子としている。本稿をまとめるにあたっては、安田先生に御指導頂いた。ここに記して、感謝申し上げます。